

〔研究ノート〕

『資本論』第2部第8稿の拡大再生産論

伊 藤 武

はじめに

「資本論」第2部のための第8稿は、マルクスの最後の『資本論』遺稿であるが、この草稿には単純再生産が論じられているばかりではなく、第1稿では不十分なスケッチでしかなく、第2稿では論じられなかったかった拡大再生産が論じられている点で、マルクスの遺稿のなかでもとりわけ重要な遺稿である。編集者エンゲルスは、第5－8稿は、病状の重圧にたいするむりやりな挑戦の痕跡をあまりにもしばしば帯びていると述べているが、それはとりわけ第8稿に顕著である。しかし、第8稿の拡大再生産論は、エンゲルス編集版では、マルクスの思考の流れを正確に追跡することは出来なくなっている。したがって、マルクスの草稿の正確な復元版によって、マルクスの思考の流れを追跡することが必要なのであるが、第8稿を含む MEGA 第Ⅱ部第11巻が公刊されたことによって初めて可能となった。

「Ⅱ）蓄積または拡大された規模での生産」という表題をもつ第8稿の拡大再生産論は、マルクス自身によって5節に分けられ、第5節のみに「5）部門Ⅱでの蓄積」という表題が付けられている。この「部門Ⅱでの蓄積」はまさにエンゲルスのいう病状の重圧にたいする挑戦の痕跡をまざまざと示しており、したがってその解読も困難なのであるが、本稿の主要課題はこの「5）部門Ⅱでの蓄積」の論述内容を検討し、マルクスの思考の流れを追跡することにあるが、行論の都合上第Ⅰ－4節の内容を紹介しておく。

1. 第Ⅰ－4節の概観

Ⅰ）拡大再生産のための前提諸条件

第1節1)のはじめに、マルクスは、「第Ⅰ部で示されたことは、個々の資本家にとっての蓄積については次のように現われること、すなわち、彼の商品資本が銀化するさいに、彼はこの商品資本のうち剰余価値を表示する一部分を（つまり剰余生産物によって担われている）それによって貨幣に転化させるが、それを彼は再び生産資本の現物諸要素に再転化させるというように現れること、つまり実際には現実の蓄積とは拡大された規模での再生産であるということであった。しかし個別商品資本の場合に現れることは年間再生産でも現れざるを得ない」¹⁾と述べて、社会的総資本の拡大再生産の前提の分析に入っている。

この社会的総資本の拡大再生産が可能になる条件として、マルクスは、「そのさい次の

ことが前提されている。1), [剰余価値が] 年間に次々に貨幣として積み立てられ, しかも, 機能している不変資本の拡張のためであろうと, 新たな産業的事業の創設のためであろうと, この額で十分である(技術的諸条件に対応している)ということである。しかし, この過程が行われうるようになるまでには, つまり現実の蓄積——拡大された規模での再生産——が始まることができるようになるまでには, もっとずっと長い間にわたる剰余価値の貨幣への転化と貨幣での積立とが必要だということもありうる。2) 拡大された規模での生産が事実上すでにあらかじめ始まっているということが前提されている。というのは, 貨幣(貨幣で積み立てられた剰余価値)を生産資本の諸要素に再転化させるためには, これらの要素が商品として市場で買えるものとなっていることが前提されている²⁾と, 第1に蓄積基金が既に形成されていること, 第2に既に単純再生産の不変資本の現物補填を超える追加的生産手段が現存していることを指摘している。

2) 貨幣資本蓄積の外見上の困難

第1の前提について, マルクスは, 「貨幣は, 商品を買ってもそのあとで買わないことによって, 流通から引き上げられて蓄蔵貨幣として蓄えられる。したがって, このような操作が一般的に行われるものとする場合には, 買い手がどこからやってくるというのかわからないように見える。」³⁾ という, 金生産者を例外として, 一般的貨幣蓄蔵の外見上の困難を指摘している。この外見上の困難の解決のために, マルクスは部門Ⅰ(生産手段の生産)での蓄積と部門Ⅱ(消費手段の生産)での蓄積を区別しなければならないとしている。

3) 部門Ⅰでの蓄積

マルクスは, 2) で指摘された外見上に困難を解決するために, 「部門Ⅰを構成している多数の産業部門での諸投資も, それぞれの特殊の産業部門内部でのさまざまな個別的投資も, {それらの規模, 技術的諸条件等々, 市場関係等々をまったく度外視すれば} それぞれの年齢, すなわち, その機能期間に応じて, それぞれ, 剰余価値が次々に潜勢的な貨幣資本に転化していく過程のさまざまな段階にあるとうことは明らかであって, ……それらの一部分は適当な大きさに成長した自分の潜勢的な貨幣資本を絶えず生産資本に転化させているが, すなわち, 積み立てられた, 剰余価値の貨幣化によって積み立てられた貨幣で生産手段——不変資本の追加的諸要素——を買っているが, 他方, 他の部分はまだ自分の潜勢的な貨幣資本の積み立てをやっている, ということである。つまり資本家たちは, この二つの部類のどちらかに属して, 一方は買い手として他方は売り手として——そして両方のそれぞれがどちらか一方だけの役割を担って——互いに相対しているのである。」⁴⁾ と,

1) MEGA, II. 11, S. 790

2) MEGA, II. 11, S. 790-791

3) MEGA, II. 11, S. 792

4) MEGA, II. 11, S. 793

資本家をさしあたり剰余生産物を売って得た貨幣を蓄積基金として積み立てているA群の資本家群と積み立てられた蓄積基金を現実に投下して追加生産手段を買うB群の資本家群とに分けて、外観上の困難を解決している。

つまり、「しかし、ここでまずしっかりと掴んでおかなければならないことは、次のことである。すなわち、Aは貨幣——剰余価値にかかわる——を（積み立てるために）流通から引き上げるのに、他方で彼は、商品を流通に投げ入れながらそれに代わる別の商品を流通から引き上げないのであって、このことによって、B、B'等々のほうでは、貨幣を流通に投げ入れてそのかわりにただ商品だけを流通から引き上げることができるようになるのである。当面の場合には、この商品はその現物形態（ならびにその用途）から見て、B、B'の不変資本の要素——固定要素であれ流動要素であれ——として入るものである。」と、I)で提起された第1の問題を解決しているのである。

さらに、マルクスは、「いまここで考察している場合には、この剰余価値ははじめから生産手段の生産手段というかたちで存在している、この剰余生産物は、B、B'、B'', 等々（I）の手のなかではじめて追加不変資本として機能する。……これは、Iの側での再生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部のことである。……違う点は、ここでは充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである。この剰余労働は、IIのために機能すべき、またそこでc（II）となるべき生産手段の生産にではなくて、生産手段（I）の生産手段に支出されたのである。」⁵⁾、「したがって、単純再生産——たんに価値の大きさだけから見れば——の内部で、拡大された規模での再生産の、現実の資本蓄積の、物質的土台が生産されるということになる。」⁶⁾と論じている。こうしてI)で提起された第2の問題を解決しているのである。

B群の資本家はA群の資本家から追加生産手段を買うのであるが、さらに追加労働者を雇い入れなければならないのであるが、資本主義的生産の基礎の上では、すでに第1部で明らかにされたように、「新たに形成された貨幣資本のうち可変資本に転化できる部分はそれが転化するべき労働力をつねに見出すとすることができる、と仮定しなければならないのである。」⁷⁾とマルクスは述べている。こうして部門IのB群の資本家にとっての拡大再生産のための機能配置が行われるのである。

4) A（I）が部門IIに売ることによる貨幣資本蓄積

3)では、B（I）の拡大再生産のための機能配置は完了しているが、しかし、A（I）の剰余生産物はそのすべてはまだ実現していない。そこで、4)では、A（I）がB（II）への販売によって貨幣化すると仮定して、部門IのA群の蓄積基金の形成を論じている。つまり、この4)では部門IのA群の資本家が部門IIの蓄積された貨幣資本を現実に投下して生産規模を拡大する資本家群Bに剰余生産物を売ってえた貨幣を蓄積する場合が問題

5) MEGA, II, 11, S. 797

6) MEGA, II, 11, S. 798

7) MEGA, II, 11, S. 802

とされているのである。

この場合、「このことはただ、A (I) がB (II) に生産手段を売るが、そのあとで消費手段を買わない、ということによってのみ、つまりAのほうの一方的な販売によってのみ行われることができる。」⁸⁾ しかし、部門Iの拡大再生産のための機能配置が単純再生産の前提のもとで考察されたように、ここでも部門IIでも単純再生産が前提されるとすれば、部門IIのBの消費手段の形態にある不変資本の全部を生産手段に転化できなくなって単純再生産すら不可能になる。

つまり、「A (I) の剰余生産物の形成や販売はそれ自身単純再生産の現象なのだから、ここでは単純再生産そのものの基礎の上で、次のような相互に制約しあう諸現象がみられるのである。すなわち部門I) での可能的追加貨幣資本の形成 {それゆえIIの立場から見ての過少消費}。部門IIでの、生産資本に転化できない商品在庫の固着、したがって (II にとっての) 相対的過剰生産。過剰な貨幣資本 (I) と再生産における不足 (II)。」⁹⁾ という困難が生じる。マルクスは「この点に関連する諸問題は、いま、部門IIでの蓄積がどのようにして行われることができるのかを見ることによって、さらに明らかになるであろう。」¹⁰⁾ と述べて「部門IIでの蓄積」に入っている。

5) 部門IIでの蓄積

a) 問題の確認と解決の方向

4) で提起された問題は、単純再生産の前提のもとでは、部門Iが1000mのうち500を蓄積するとすれば、部門IIの不変資本IIcの過剰生産が生じるということであった。マルクスは、5) のa) でこの問題を確認するとともに、解決の道を、「そのさい考えるべきことは、Iでは単純再生産が行われただけだということ、表式Iに見られる諸要素が——たとえば来年といった将来の拡大を目的として——違うように配列ないし配置されているだけだということである。」¹¹⁾ と解決の方向を示唆し、「いま避けようとしているこの困難が単純再生産の考察では生じなかったという事情は、とりもなおさず、ここでの問題がIの諸要素の再配列、違った配置 (再生産に関しての) だけに起因する一つの独自の現象にあることを証明している。この別の配置なしには、およそ拡大された規模での再生産は行われえないのである。」¹²⁾ と、解決の道を示している。

部門IIの拡大再生産のための配置

マルクスは、a) で確認された困難を解決するために、部門Iが剰余価値1000の半分を蓄積するという前提のもとで、I ($v + 1/2m$) がIIcに等しい次の表式を作成している。

$$I) 4000c + 1000v + 1000m = 6000$$

8) MEGA, II. 11, S. 802

9) MEGA, II. 11, S. 803

10) MEGA, II. 11, S. 803-804

11) MEGA, II. 11, S. 804

12) MEGA, II. 11, S. 806

a)

$$\text{II) } 1500c + 376v + 376m = 2252$$

この表式について、マルクスは、単純再生産の表式よりも第Ⅱ部門の生産物が小さい表紙を作成したのは、「単純再生産の与えられた諸要素の量ではなくて、それらの質的規定が変化するのであって、この変化が、そのあとに続いて行われる拡大された規模での再生産の物質的前提なのである。」¹³⁾と、拡大再生産のためには、単純再生産とは異なった再生産の諸要素の配置がなければならないと指摘し、そのために年間総生産物が単純再生産の場合よりも小さい表式を作成したとことわっているのである。そして、「表式 a) では、その機能配置が拡大された規模での再生産の物質的基礎をなしているだけである。」¹⁴⁾と注釈している。

この表式 a) について、マルクスは、部門Ⅰでも部門Ⅱでも、剰余価値の半分が収入として支出されないで蓄積されると、すなわち追加資本の要素の転化させられる、と前提している。したがって、Ⅰ ($1000v + 500m$) だけが収入として支出され、Ⅱ $1500c$ と転換されるが、この過程は既に単純再生産の過程として分析されている。

そこで、問題は蓄積のための部門間転換である。そこで、マルクスは、研究課題を「ここで研究しなければならないのは、 $500 \text{ I } m$ と $376v + 376m$ (Ⅱ) であって、それらが一方では両方のそれぞれの側での内部関係にかかわる限りで、他方では両方の側のあいだでの運動にかかわるかぎりで、研究する必要があるのである。」¹⁵⁾と提起している。

つまり、部門Ⅰおよび部門Ⅱのそれぞれの内部での転換による蓄積基金の形成とⅡ部門間の転換による蓄積基金の形成が研究課題であると提起されているのである。しかし、すでに、部門Ⅰの蓄積を考察した際には蓄積される $500m$ は 400 が不変資本に、 100 が可変資本に転化されるとして部門Ⅰの内部での蓄積のための配置を論究していたのであり、4) で提起した問題は、ⅠのAが 100 の生産手段をⅡのBに売ることによって、ⅠのAが蓄積基金を積み立てるということであった。この問題は、他面では部門Ⅱでの蓄積基金形成の問題である。そして、 $376v$ (Ⅱ) は、ここで前提されている単純再生産のもとではⅡの資本家が直接にⅡの労働者に売ることとしてすでに解決されている。したがって、問題は部門間転換によるⅡにおける蓄積基金の形成である。Ⅱにおける蓄積基金の形成が論証されるならば、それによって $500m$ (Ⅰ) の一方的購買とⅠにおける蓄積基金の形成が解決されるからである。

そこで、マルクスは、「Ⅱでも同じく剰余価値の半分が蓄積されることが前提されているのであるから、ここでは 188 が資本に転化することになり、そのうちの $1/4$ の 47 が可変資本で、これを概数計算のために 48 とすれば、不変資本に転化されるべき $188 - 48 = 140$ が残る。」¹⁶⁾としている。可変資本に転化される 48 の転換は、部門Ⅱでの部門内での転換で

13) MEGA, II. 11, S. 806

14) MEGA, II. 11, S. 807

15) MEGA, II. 11, S. 807

16) MEGA, II. 11, S. 807

あるが、不変資本に転化される 140m の転換は部門間転換である。これが問題なのである。

b) 新しい問題の発見

そこで、マルクスは、「われわれは、ここで一つの新しい問題にぶつかる」として、「140 m (Ⅱ) は、m (Ⅰ) の諸商品のうちのそれと同じ価値額の一部によって補填されることによってのみ生産資本に転化することができる。……この補填はⅡの側での一方的購買によってのみ行われることができる。……したがって、Ⅱは 140 (Ⅰ) m を現金で買わなければならないが、しかもそのあとで自分の商品をⅠに売ることによって、彼のもとにこの貨幣が還流するということなしにそうしなければならないのである。しかも、これは、毎年の新たな再生産のたびに——それが拡大された規模での再生産であるかぎり——絶えず繰り返される過程なのである。そのための貨幣源泉はⅡのどこでわき出るのか？」¹⁷⁾ と部門間転換のなかでのⅡに一方的購買の貨幣資本の源泉という問題を提起しているのである。

部門Ⅱで蓄積を行うのはⅡBの資本家である。ⅡのB群の資本家が追加生産手段をⅠから一方的に買う貨幣は、ⅠのAのもとに蓄蔵されるのであるから、ⅡのBはこの蓄積基金をどのようにして積み立ててきたのが問題となる。あるいは、別言すれば、ⅡのBはすでに蓄積された貨幣資本を現実には拡大再生産のために投下するのであるから、ⅡのAはいかにして将来の拡大再生産のための蓄積基金を積み立てることが可能であるのか、という問題である。

マルクスは「それどころか、Ⅱは、新たな貨幣資本の形成のためには、すなわち現実の蓄積に伴ってこの蓄積の条件（資本主義的な基礎の上では）をなしており、実際にはまず単純な蓄蔵貨幣形成として現れる新たな可能的貨幣資本の形成のためには、全く不毛の地のように見える。」¹⁸⁾ として、まず、第一に 376v (Ⅱ) があるとして、種々考察を加えているのであるが、376v (Ⅱ) が新たな貨幣資本形成の源泉になりえないことは最初から明らかなことである。問題は、Ⅱv の転換ではなく、Ⅱm の一部分の貨幣化による蓄積基金の形成なのである。そしてこの問題が、第8稿の拡大再生産の部門Ⅱにおける蓄積問題として第8稿の最後まで研究されていくのである。

1) いわゆる「拡大された規模での再生産の出発表式」について

マルクスは、改めて $I (v + 1/2m) = IIc$ の、先の表式とは異なる表式を作成している。エンゲルス版での「第1例」である。

B) 拡大された規模での再生産の出発表式

$$I) 4000c + 1000v + 1000m = 6000$$

$$II) 1500c + 750v + 750m = 3000$$

17) MEGA. II. 11. S. 808

18) MEGA. II. 11. S. 808

この表式が選ばれたのは、年間総生産物が、単純再生産の場合と同じ9000とするためであろうが、 $c:v$ の比率はⅠ)では4:1、Ⅱ)では2:1である。

この表式BのⅠ)で、剰余価値の半分500が蓄積されると仮定すれば、 $1500c$ (Ⅱ)と取り換えられるのは $1000v+500m$ (Ⅰ) $=1500$ である。この転換は単純再生産の過程である。

$500m$ (Ⅰ)のうち400は不変資本に転化し、100は可変資本に転化すると仮定する。この400 (Ⅰ)の内部での転換はすでに論究されている。マルクスは、「そこでわれわれはB)のⅠ)として、 $4400c+1000v+100m$ (Ⅰ)を受け取ることになる。」¹⁹⁾としているのであるが、部門Ⅰで現実に蓄積を行うのは部門Ⅰの資本家Bであり、Bはこれまで積み立ててきた蓄積基金を現実に投下し、Aから400の追加生産手段を買い、100を追加可変貨幣資本として前貸しする。したがって、B (Ⅰ)の機能配置は $4400c+1100v$ (貨幣)であり、B (Ⅰ)の機能配置は完了しており、 $100m$ (Ⅰ)はAの手になお残されている生産手段である。Aはこの生産手段を部門ⅡのBに売って貨幣化して積み立てるのである。

とはいえ、マルクスはこの出発表式では、第Ⅰ部門の資本家をさしあたり貨幣蓄蔵を行っている資本家Aと積み立てられた蓄積基金を現実に投下する資本家Bとを区別していない。したがって、蓄積基金の形成はここでは問題とされていないのである。

$100m$ (Ⅰ)について、マルクスは、「BのⅡ)のほうでは、蓄積のためにⅠから $100m$ (Ⅰ)を買い、それが今度はⅡの追加不変資本になるが、他方、Ⅱ)が支払う貨幣はⅠの追加可変資本の貨幣形態に転化する。そこでBのⅠ)は、 $4400c+1100m$ (Ⅰ) (貨幣) $=5500$ となる。」²⁰⁾と述べている。しかし、ⅡBが支払うのはⅠ)のAに対してであって、Aによって蓄積基金として蓄蔵されるのであって、「Ⅰの追加可変資本の貨幣形態」になるわけではないであろう。ⅠAとⅠBとを区別しないここでは、Ⅱが支払う100はⅠの追加可変資本になる、と想定されなければならないが、ここでの問題は、Ⅱ)のBがⅠ)から一方的に買う100の貨幣はどのようにして蓄積されたのか、という問題なのである。

マルクスは、この問題にはふれずに、部門Ⅱについて、「BⅡ)は今では不変資本として $1600c$ をもっている。これを処理するためにはⅡ)は $50v$ を貨幣で労働力の買入れのために追加しなければならない。したがってⅡの可変資本は750から800に増大する。そこでBのⅡ)は次のようになる。

B) Ⅱ) $1600c+800v+50m$ (50の追加可変資本のための在庫として) $+100m$ (追加の $100v$ Ⅰのための在庫として) $+最後に600m$ (これはⅡ〔の資本家〕自身の消費ファンドになる。)]²¹⁾と述べている。

部門Ⅱの可変資本は800に増大しているが、この50の追加可変貨幣資本はⅡ)のBによって貨幣形態で前貸しされるとされているのであって、Ⅱは追加不変資本を買う100と追加可変資本50を貨幣で前貸しするとされているのであるが、ここでも問題は、Bの手になお残されている蓄積基金は積み立てられてきたのか、という問題である。したがって、ここ

19) MEGA, II. 11, S. 810

20) MEGA, II. 11. S. 810-811

21) MEGA, II. 11. S. 811

での問題は50m（Ⅱ）がいかにして貨幣化され蓄蔵されるのかという点であるが、マルクスのこの第Ⅱ部門の拡大される規模での再生産の出発式では、第Ⅱ部門の剰余価値の貨幣化による蓄積基金の形成は論究されていないのである。

この点について、マルクスは、「じっさい、BのⅡ）では、その全生産物が蓄積のために必要な形態で整えられるためには、剰余価値のうち、まえよりも150だけ大きい部分が必要消費手段の形態で再生産されていなければならない。拡大された規模での再生産が始まれば、Ⅰの可変資本100は、Ⅰの労働者の手を経て、Ⅱに還流する。これに対して、Ⅱは100m（商品在庫にある）をⅠ〔の労働者階級〕に引き渡し、同時に商品在庫にある50をⅡ自身の労働者階級に引き渡す。BのⅡの消費ファンドになる600mを引き去ると、蓄積のために変えられた配列は次のようになる。

$$\begin{array}{rcl} \text{B) } \text{Ⅰ) } 4400c + 1100v \text{ 貨幣} = 5500 & & \\ \text{Ⅱ) } 1600c + 800v \text{ 貨幣} = 2400 & \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{Ⅰ) } 4400c + 1100v \text{ 貨幣} = 5500 \\ \text{Ⅱ) } 1600c + 800v \text{ 貨幣} = 2400 \end{array}} \right\} = 7900 \\ \hline 6000c + 1900v & + 150 \text{ (Ⅱ) 必要生活手段の形態での商品在庫} & \text{] }^{22)} \end{array}$$

と説明している。

マルクスは、「BのⅡ）では、その生産物が蓄積のために必要な形態で整えられるためには、剰余価値のうち、前よりも150だけ大きい部分が必要消費手段の形態で再生産されなければならない。」と述べているのであるが、この150の追加労働者のためにあらかじめ必要消費手段が生産されていなければならないということであり、それは今年度内には実現されないということであろう。それゆえ、「拡大された規模での再生産が現実には始まれば、Ⅰの可変資本100は、Ⅰの労働者階級の手を経て、Ⅱに還流する」とマルクスは言うのであるが、それはⅠmvの貨幣化による蓄積基金の形成は問題とされていないからである。しかし、ここでの問題は貨幣の還流ではなく、一方的販売による貨幣資本の積立であり、他方での一方的購買のための貨幣資本の蓄積である。それはマルクス自身が提起した問題であった。

したがって、「蓄積のために変えられた配列」は、次年度の拡大再生産のための配列であるが、ここでは、マルクスは、第Ⅰ部門及び第Ⅱ部門の追加労働者のための必要生活手段として150（Ⅱ）が商品在庫として次年度に繰り越されるとしているのである。しかし、部門Ⅰの剰余生産物は貨幣化されているのであって、拡大再生産が始まれば、Ⅰの追加労働者は労賃の等価、可変資本部分を新たに生産するとともに、労賃の支払いを受け、労賃を消費手段に支出するが、それは拡大されたcⅡの消費手段である。したがって、ⅡはⅠの追加労働者のために100の消費手段を備蓄する必要はない。

つぎに問題になるのは、Ⅱでの蓄積される剰余価値のうち可変資本に転化される部分の貨幣への転化である。マルクスはⅠの追加可変資本と同様に、Ⅱは追加労働者のために消費手段50を備蓄しているとしているのであるが、拡大再生産が始まれば、増大した可変資本は増大したvⅡとしてあらわれ、追加労働者は継続労働者とともに、vⅡを消費するの

22) MEGA. II. 11. S. 811

ではないか。マルクスのようにすることは、追加労働者の二重消費が生じる。

部門Ⅱでの蓄積に残されている最大の問題は、部門Ⅰからの一方的な追加生産手段の購買のための貨幣資本形成の源泉はどこにあるのか、という問題であった。それは部門Ⅱの剰余価値の貨幣化によるしかないのである。しかし、この出発表式では、剰余価値の貨幣化による蓄積基金の形成の源泉は見当たらないのである。二部門間転換による第Ⅱ部門における蓄積基金形成の可能性は、 $I(v+m/x)$ 、当面の場合には $I(v+1/2m)$ とⅡcとの転換によるしかない。

それゆえ、マルクスは、「われわれが開始した9000の生産物は、再生産のために、用途から見て、また貨幣取引を考慮しないとして、次のように準備されている。」²³⁾として、もう一度出発表式を掲げ、数年次にわたる表式展開を試みている。

$$\begin{array}{l} \text{A) } \left. \begin{array}{l} \text{I) } 4000c + 1000v + 1000m = 9000 \\ \text{II) } 1500c + 750v + 750m = 3000 \end{array} \right\} = 9000 \\ \text{B) } \left. \begin{array}{l} \text{I) } 4400c + 100v + (1500 \text{ 消費ファンドで}) = 6000 \\ \text{II) } 1600c + 800v + (600 \text{ 消費ファンドで}) = 3000 \end{array} \right\} \text{合計} = 9000 \end{array}$$

表式A)は出発表式であり、B)は転換が終わったあとでの表式である。

この表式B)ではⅠの可変資本は100vとされているが、それは蓄積額500mが400c+100vに転化されるからである。Ⅰ)の不変資本は4400cとなっており、Ⅱ)では可変資本は800vとなっているのであるから、あさらに1100vに訂正されなければならない。さらに、Ⅰ)の消費ファンド1500とされているが、それはⅠ)の(1000v+500m)が1500cⅡと転換されたものであり、消費手段1000はⅠ)の労働者によって消費されるのであるから、Ⅰの可変資本は1100とされなければならないであろう。500は資本家によって消費される。つまり、1500Ⅰの消費手段はⅠの労働者と資本家によって消費されているのである。つまり、Ⅰの(1000v+500m)の転換はⅠの側からは単純再生産の過程であるから、消去されなければならない。この表式では、Ⅰの追加可変資本が問題とされているのである。

他方、部門Ⅱでは、不変資本は1600cに増大しているのであるから、Ⅱは追加不変資本100を手に入れているわけである。それは100mⅠと転換されたものである。さらに、Ⅱの可変資本は追加可変資本を含めて800vとされている。Ⅱ)は消費手段生産部門であるから、50mⅡは直接に追加可変資本に、つまり、追加労働力に転化されるとしているのであろう。そして部門Ⅱの600の消費手段は、部門Ⅱの資本家の個人的消費手段である。したがって再生産のための機能配置は可変資本部分と消費ファンドでⅠの場合とⅡの場合では異なっているのである。Ⅱの追加可変資本は、この追加労働者が生産したものではない。

マルクスは、「いまこの基礎の上で現実の蓄積が行われれば、われわれは次のものを受け取る。」²⁴⁾として次の表式を掲げている。

$$\text{I) } 4400c + 1100v + 1100m$$

23) MEGA. II. 11. S. 811

24) MEGA. II. 11. S. 812

Ⅱ) $1600c + 800v + 800m$

この表式では、Ⅰの可変資本は $1100v$ とされているのである。

この表式について、マルクスは、次のように分析している。

「Ⅰ）では同じ比率で蓄積が続けられ、したがって、 $550m$ が収入として支出され、 $550m$ が蓄積されるものとしよう。まず $1100v$ (Ⅰ) が $1100c$ (Ⅱ) によって補填され、同様にⅡでも $(550(m)Ⅰ)$ と $550(Ⅱ)$ との交換によって、したがって合計 $1650(v+m)$ Ⅰが実現されなければならない。しかし、補填されなければならない不変資本は 1600 だけである。したがって、 50 の不足額が $800m(Ⅱ)$ から補われなければならない。これが行われれば(ここではさしあたりわざと貨幣は度外視すれば)、この取引の結果として次のものが残ることになる」²⁵⁾ と説明して、次の表式を掲げている。

Ⅰ) $4400c + 550m$ (しかし消費ファンドとして $1650Ⅱ$)

Ⅱ) $1650c$ (つまり上述の取引によって 50 が追加されている) $+ 800v$ (貨幣で、というのは、商品は労働者の消費ファンドになったのだから) $+ 750m$

この表式では、Ⅰの蓄積分 $550m$ のうち 440 は追加不変資本として直接に Ic に合体され、 110 が追加可変資本となるべきものである。しかし、この追加可変資本に転化される $mⅠ$ の転換には触れられていない。Ⅰ) での $550m$ は資本家Ⅰの消費ファンドであるから、それゆえ、Ⅰでは消費ファンドとして $1650cⅡ$ が掲げられているのである。それゆえにⅡの不変資本は $1650c$ に増大しているのである。Ⅰの消費ファンドとして消費手段Ⅱが挙げられているのであるが、Ⅱでは可変資本 $800v$ が支払われ、 800 の消費手段が消費され、貨幣形で還流しているのである。つまり、ここでも単純再生産に属する可変資本部分の取り扱いとは異なっているのである。

つづいて、マルクスは、Ⅱ) について、次のように述べている。「しかし、 $v:c(Ⅱ)$ の割合がもとのままならば、 50 の追加された不変資本に対して同じくさらに $25v$ が必要であり、 $750m$ からとられなければならない。したがって、次のようになる。

Ⅱ) $1650c + 800v$ (貨幣で) $+ 25v$ (商品で) $+ 700$ { 725 の誤り }」²⁶⁾

ここでは 800 の可変資本は貨幣形態に復帰しているのであるが、追加可変資本 25 は商品形態のままである。さらに、Ⅱは 1 から 110 の追加生産手段を買わなければならないし、さらに追加可変資本として $55m$ が必要となるが、ここではその点には触れられていない。それはともかくとして、ここではⅡの可変資本 $800v$ は貨幣形態で前貸しされているのであるが、Ⅰ) では消費手段形態のままである。つまり、ここでも可変資本の転換はⅠとⅡでは異なっているのである。

こうして、現実の拡大再生産が始まり諸要素の転換が行われれば、ここでは、Ⅰ ($1100v + 550m$) がⅡ 1600 よりも大きいことが検出されたのである。その結果、Ⅰ ($v + 1/2m$) との交換でⅡ m の一部分がここでは不変資本に転化されることとなっている。これは、これ

25) MEGA. II. 11. S. 812

26) MEGA. II. 11. S. 812

までの展開にはなかったことである。

つづいて、マルクスは、Ⅰの550mの資本化の分析に移っているのであるが、Ⅰの資本構成を4:1ではなく3:1とする計算上の誤りを犯しながら、以後数年時にわたる表式展開を行っているが、当然のことながら資本構成の低下に直面して、この表式分析を放棄している。

次に、マルクスは次のような表式を作成している。

$$\text{Ⅰ) } 4500c + 1000v + 1000m$$

$$\text{Ⅱ) } 1800c + 350v + 350m^{27)}$$

しかし、マルクスは計算間違いを犯して分析を放棄している。

そこで、あらためて、次の表式を作成している。

$$\text{Ⅰ) } 4135c + 827v + 1238m$$

$$\text{Ⅱ) } 1800c + 360v + 640m^{28)}$$

この表式では、両部門の資本構成c:vで同じであるが、剰余価値率は異なり、Ⅱ部門の剰余価値率はⅠ部門より高くなっている。しかし、資本主義的生産のもとでは剰余価値率は同じとしなければならないだろう。

この表式について、マルクスは「まず、 $827 + 973m(\text{Ⅰ}) = 1800c(\text{Ⅱ})$ が行われる。

そこで、次のようになる。

$$\text{Ⅰ) } 4135c + 827v (\text{貨幣で}) + 265m + (1800 \text{消費ファンドで})$$

$$\text{Ⅱ) } 1800c (\text{不変資本の現物形態で}) + 360v + 650m (\text{Ⅱでの剰余価値率は、} 9v : 16m \text{である。)}^{29)} (650 \text{Ⅱ} m \text{は} 640m \text{の誤記……伊藤})$$

この表式では、資本家の個人的消費は973でⅠ($827v + 973mk$) = Ⅱcであるから、「第1例」の出発表式と同じである。 $(827 + 973m)$ Ⅰの転換は単純再生産過程であるから、Ⅰの可変資本は貨幣形態を回復しており、Ⅱの不変資本は現物形態で補填されているのであるから、Ⅰは労賃827と資本家の消費のために973を支出して1800の消費手段を買い、Ⅱはその貨幣で不変資本を現物で補填し、Ⅰの可変資本は貨幣形態で還流したのである。したがってⅠの労働者と資本家は1800の消費手段を消費しているのであり、Ⅰは1800の消費ファンドを持っているわけではないだろう。

しかし、Ⅰには、まだ $1238 - 973 = 265m$ が残されている。そこで、この265Ⅰmが蓄積される。しかし、Ⅰでの剰余価値率の約150%に対して蓄積率 = 蓄積額 / 剰余価値額は約21.4%と低い。Ⅱでの剰余価値率は約178%である。

続いて、マルクスは、「ⅡはⅠ(m)から100を買い、 $20v$ を追加する。そこで、

Ⅱ) $1900c + 380v$. したがって、640は620に縮小される)」³⁰⁾とⅡの拡大再生産を問題としている。しかし、Ⅱが追加不変資本100をⅠから買うとするなら、Ⅱのどこから100とい

27) MEGA, II. Bd, 11, S. 815

28) MEGA, ebenda

29) MEGA, ebenda.

30) MEGA, II. Bd, 11, S. 815

う貨幣が湧き出たのであろうか？ IIは手持ちの貨幣を支出するのだということは問題の解決にはならない。マルクスが提起した問題は、このIIがIから100の不変資本を買う貨幣源泉の問題であったはずである。

さらに、マルクスは、「Iにはまだ265mがある。これは $212c+53v$ （後者はIIから買わなければならない。）に転換されなければならない。IIでは、Iでまだ現物で在庫していた $53v$ I充用するために $10\frac{3}{5}$ をさらに追加しなければならない。したがって、まだ存在している620m（II）から $63\frac{3}{5}$ が差し引かれて、 $556\frac{2}{5}$ が残る。

したがって、今や次のようになる。

I) $4135+212c+827+53v$ （+消費ファンド1800）

II) $1953c$ $370\frac{3}{5}v$ （+ $556\frac{2}{5}$ 消費ファンド）

したがって、I) $4347c+880v$

II) $1953c+370\frac{3}{5}v$ 再生産がおこなわれれば、

I) $4347c+880v+1320m$

II) $1953c+370\frac{3}{5}v+656\frac{1}{3}$ ³¹⁾

しかし、前段では、IIはIから100の追加不変資本を買うとされているのであるから、Iに残されているのは265mではなく、165であろう。したがって、マルクスは前段においてIIは $100c+20v$ を蓄積するという想定を放棄して、Iは265mを蓄積するとしているのである。しかし、IIではmは100の追加不変資本のために20が追加可変資本として20が差し引かれた620とされているのであり、こうした前提で計算がおこなわれているのである。

さらに、265m Iは $212c+53v$ に転化するとしているのであるが、次の計算ではIIは100cの追加不変資本が追加されている。出発点では $c:v$ は5:1であったのであるが、 $212c+53v$ は4:1である。ここでも、マルクスは第1例でみたような計算上の誤りを犯しているのである。しかし、II)では出発点と同じ5:1である。

したがって、I) $4135+212c+827+53v=4347c+88v$

II) $1800+53v+360+10\frac{3}{5}=1853c+370\frac{3}{5}$

とならなければならない。そして、m IIから差し引かれた残りは $576\frac{2}{5}$ となる。

このように、マルクスは計算間違いを犯したあげく、これまでの表式分析を放棄して、新しい $(v+1/2m)>IIc$ の表式を作成したのである。エンゲル版での「第2例」である。

2) いわゆる「表式第2例」について——解決の糸口 I $(v+1/2m)>IIc$ の場合

マルクスは、第2例の分析を中断して、拡大再生産における両部門間の関係について、一般的に次のように論じている。

31) MEGA, II, 11, S. 815-816

「蓄積を前提すれば、 $v+m(I)$ は cII よりも大きいのであって単純再生産でのように cII に等しいのではないということは自明である。というのは、1) I はその剰余価値の一部分をそれ自身の生産資本に合体させ、それを不変資本に転化させるのであり、したがって、同時に消費手段 II によって補填されることはできないからである。/2) I は自分の剰余生産物から、 II の中での蓄積に必要な不変資本を供給しなければならないのであって、それは全く、 II が I に I の剰余生産物のうち I 自身が追加資本（不変資本）として取得する部分のために必要な追加可変資本を供給しなければならないのと同様だからである。言うまでもなく、現実の追加可変資本は追加労働力から成っている。例えば、今の場合に、資本家 I は奴隷所有者でもあればしなければならないように、自分が使用する追加労働力のために II から必要生活手段を在庫として買ったりため込んだりはしない。 II と取引するのは労働者自身である。しかし、このことは資本家の立場から見れば追加労働力の消費手段は彼が必要な場合に追加する労働力を生産し維持するための手段でしかなく、したがって彼の可変資本の現物形態でしかないということを妨げるものではない。資本家自身がさし当たって行った操作、ここでは I が行った操作は追加労働力を買うために必要な新たな貨幣資本を蓄えたことだけである。彼がこの追加労働力を取り入れてしまえば、この貨幣はこの労働力にとっての商品 II の購買手段となるのであり、したがって、 II には労働力のための消費手段が見いだせるようになっていなければならないのである。」³²⁾

蓄積の場合には、 I がその剰余生産物から、 I 自身と II のための追加生産手段を供するということが自明である。しかし同様に、 I は剰余生産物の一部分を II に売って追加労働力のための新たな貨幣資本を蓄積することもすでに明らかにされている。しかし、問題は、 II が I から追加生産手段を買うための追加貨幣資本は部門間転換によってどのようにして形成されるのかということである。しかし、マルクスはこの問題には論及していない。

ここでマルクスが論じているのは I での拡大再生産である。 I は剰余生産物の一部を自分自身の生産手段に合体させると同時に、追加労働力のための可変資本を貨幣形態で前貸しする。拡大再生産が始まれば、 I の追加労働者は支払われた労賃の等価を商品資本の可変資本部分として生産し、労賃を消費手段に支出する。拡大再生産によって II もまた拡大再生産がおこなわれていけば、 I の追加労働者は支払われた労賃で cII の一部分を買うのである。

さらに、マルクスは、この点について、次のように再論している。

「 I が II の追加不変資本を自分の剰余生産物の中から供給しなければならないのと同様に、 II はこれと同じ意味で I のための追加可変資本を供給する。可変資本に関するかぎりでは、 II は自分の総生産の、したがってまたとくに自分の剰余生産物のより大きな部分を必要消費手段の形態で再生産することによって、 I のために、また自分自身のために蓄積するのである。」³³⁾

32) MEGA, II. 11, S. 817-818

33) MEGA, II. 11, S. 819

ⅡはⅠの追加可変資本を供給するのではなく、追加労働者にとっての消費手段を供給するのであり、それを拡大された $cⅡ$ のなかから供給するのである。

さらに、マルクスは、Ⅰについて、次のように詳論している。

「拡大する資本基礎の上で生産がおこなわれる過程では、 $v+mⅠ=cⅡ+資本$ として再び合体される剰余価値部分+Ⅱでの生産の拡大に必要な追加不変資本部分でなければならない。そしてこの拡大の最小限は、それなしではⅠ自身での蓄積（実体的な）が実現不可能な最小限である。」³⁴⁾

ここで最小限とされているのは、 $v+mⅠ=cⅡ+資本$ として再び合体される剰余価値部分であろう。しかし、それではⅠの追加労働者の追加貨幣資本のためのファンドはなくなるであろう。

さて、マルクスは、いわゆる「第2例」として掲げている表式は次のようなものである。

$$a) \quad I) 5000c + 1000v + 1000m$$

$$II) 1430c + 285v + 268m$$

この表式について、マルクスは、「いま、Ⅰ）〔すなわち資本家階級Ⅰ〕が m の $1/2$ すなわち500を消費し、他の半分を蓄積するとしよう。この場合には、 $1000v + 500m = 1500$ が1500（Ⅱ）に転換される。Ⅱでは c は1430でしかないから70を追加しなければならない。こうして285 m （Ⅱ）から70が差し引かれて、215が残る。そこでわれわれは次のものを受け取る。

$$b) \quad I) 5000c + 500m (+消費ファンドで1500)$$

Ⅱ) $1430c + 70c + 285v + 215m$ ここでは70 m （Ⅰ）は直接に c （Ⅱ）に合体されるので、この追加不変資本を動かすための可変資本として70/5すなわち14を必要とする。したがってこの14が再び215 m （Ⅱ）からさじひかれて、201（Ⅱ）が残り、そこでこうなる。

$$II) 1500c + 299v + 201m \text{ }^{35)}$$

この転換分析では、b) 表式の消費ファンド1500（Ⅰ）はⅡ（ $1430c + 70m$ ）と転換され、Ⅰの労働者と資本家によって消費されているのであるから、不用であろう。

マルクスはこの転換について、「 $(v + 1/2m)$ 対1500（Ⅱ）の転換は単純な再生産過程の一過程であり、そのかぎりではもうかたづいている。とはいえ、ここでいくつかの独自性を述べておく必要がある。というのは、ここでは $(v + 1/2m)$ Ⅰは $cⅡ$ によってではなく、 $cⅡ$ に $mⅡ$ の一部分を加えたものによって補填されるのだからである。」³⁶⁾と論及すべき問題を提示している。

マルクスは、この表式のⅡについて、草稿の最後で、65と69ページの分析についてのメモを次のように書いている。

「Ⅱについては次の計算が。はじめは

$$II) 1430c + 285v + 285m = 2000$$

34) MEGA, II. 11, S. 819

35) MEGA, II. 11, S. 817

36) MEGA, II. 11, S. 817

Ⅱは $1430c + 70m = 1500$ をⅠに売り、その代わりに 1500 Ⅰを受け取っているが、 m については、今では $285 - 70 = 215$ であり、したがって今では次のようになる。

$1500c + 285v + 215m = 2000$ しかし $70c$ に対してより多くの可変資本つまり $70/5 = 14$ が必要であり、したがって、これは m (Ⅱ) から差し引かれて v (Ⅱ) 加えられる。そこで

Ⅱ) $1500c + 299v + 201m = 2000$ となる。

Ⅰは100の貨幣でⅡから ($100v$) を買い、 201 から差し引かれて 10 Ⅰが残る。Ⅱはそれに対して $100m$ Ⅰを買い、 100 に対して約18の可変資本が必要で、

$1600 + 299 + 101$ は

$1600c + 317v + 83m = 2000$

となる。³⁷⁾

このメモでは、貨幣流通の媒介無しで、Ⅱの生産物2000の拡大再生産のための機能配置が問題とされているだけである。Ⅱでも $v:c$ の比率はほぼ $1:5$ であるから、 100 の追加不変資本に対する可変資本は20であろう。

さて、マルクスは、表式 b) の「独自性」について、次のように詳論している。

「b) で考察した事例に立ち返れば、この事例の特徴は c Ⅱが $(v + 1/2m)$ よりも、すなわちⅠのうち消費手段に転換されるべき部分——収入として支出される部分——よりも小さいということ、したがって $1500v + m$ (Ⅰ) をそのように転換するために、剰余生産物(Ⅱ)の一部分(=70)が、それによって直ちに市場を受け取る(実現される)ということである。 c Ⅱについて言えば、それは、Ⅱでの単純再生産が行われうるためには同じ価値額の $(v + m)$ Ⅰによって補填されなければならない(他のすべての事情が変わらなければ)のであり、その限りでは、ここではもうこれ以上考察する必要はない。それを補う $70m$ (Ⅱ) のほうはそうではない。Ⅰにとっては単なる消費手段による 1500 (Ⅰ) の補填であり、たんに消費を目的とする商品交換であることが、Ⅱにとっては——単純再生産の内部では異なり、直接的蓄積過程なのであり、Ⅱの剰余生産物の一部分が消費手段の形態から、追加不変資本の形態に転化することなのである。Ⅰが70の貨幣(剰余価値の転換のための貨幣準備)で $70m$ Ⅱを買ったときに、もしもⅡがそれにたいして $70m$ (Ⅰ) を買わずに70を貨幣資本として蓄積するとすれば、この貨幣資本は——ふたたび生産にはいる生産物の表現ではないにせよ——たしかにつねに追加生産物の(ほかならぬそれを可除部分とする剰余生産物Ⅱ)の表現ではあるが、しかしⅡの側でのこの貨幣蓄積は、同時に生産手段の形態にある売れない 70 (Ⅰ) の表現でもある。つまり、Ⅱの側での再生産が同時に拡大されないことに対応して、Ⅰでの相対的過剰生産が生じることになる。しかし、このことは度外視しよう。Ⅰからきた70の貨幣がⅡの側からの $70m$ (Ⅰ) の購入によってⅠに帰ることがまだ行われないうか、または、まだ部分的にしか行われないう期間を通じて、貨幣での70はその全部又は一部分が、Ⅱの手にある追加貨幣資本としての役割を演じる。(そして、このことはⅠとⅡとの商品が互いに補填されあうことによって、貨幣がその出

37) MEGA, II, 11, S. 828

発点に還流する以前の両者のあいだのどの転換についてもあてはまる。)しかし、貨幣はここではただ一時的にこの役を演じるだけである——自体が正常に経過するかぎりでは。」³⁸⁾

ここでは、 $(v+1/2m)$ I との転換によって $70m$ II が II の追加不変資本に転化されることが問題とされている。II は $(v+1/2m)$ との転換によって、 $70m$ II が貨幣化され、その 70 (貨幣) を蓄蔵する。ここに II における貨幣蓄蔵の源泉の一つがある。I から $70m$ I を買うのは蓄積された貨幣資本を現実投下して生産を拡大する II の B グループの資本家である。

マルクスは「I から来た 70 の貨幣が II の側からの $70m$ (I) の購入によって I に帰ることがまだ行われぬか、またはまだ部分的にしか行われぬ期間を通じて、70 の貨幣は、その全部または一部分が、II の手にある追加貨幣資本としての役割を演じる。(そしてこのことは、I と II との商品が互いに補填されあうことによって、貨幣がその出発点に還流する以前の両者の間のどの転換についても当てはまる。)しかし、貨幣はここでは一時的にこの役割を演じるだけである。——事態が正常に経過するかぎりでは。)と述べているのであるが、部分的にしか還流しない場合には、I での過剰生産が生じよう。マルクスは、この場合には、事態が正常に経過するかぎりでは、「貨幣はただ一時的にこの役割を演じるだけである。」と述べているが、事態が正常に経過するかぎりでは、貨幣はその出発点に還流すると考えているのであり、ここでは貨幣は両部門の転換を媒介する流通手段としてのみとらえているのであり、II における貨幣蓄蔵は問題とされていない。しかし、部門 II での蓄積で論ずべき問題は、II での貨幣蓄蔵の問題であつたはずである。

マルクスは、続けて、「b) について、さらに言うておかねばならないのは、 $70m$ (I) を不変資本 (II) につけ加えるためには、同時に可変資本を 14 だけ拡大することが必要だということである。このことは、——I で剰余生産物が直接に資本 I に再合体される場合とまったく同様に——II での再生産が引き続き資本化をすすめる傾向をもって行われているということ、したがって、剰余生産物のうち必要生活手段から成っている部分が拡大されるということを前提している。」³⁹⁾と指摘している。

ここでは追加労働者のための必要生活手段の拡大再生産、部門 II での拡大再生産の必要を指摘している。しかし、拡大再生産がおこなわれれば、I の追加労働者は cII を購入するのである。

再度の考察

このような考察の後に、マルクスは、「9000 という生産物は、 $500m$ (I) が資本化されることになれば、再生産のために次のような配置を取らなければならない。」⁴⁰⁾として、「(ただ商品だけを考察するかぎり)」として、改めて拡大再生産のための機能配置を次の

38) MEGA. II. 11, S. 820

39) MEGA. II. 11, S. 820-821

40) MEGA. II. 11, S. 821

ように示している。

「b) I) $5000c+500m$ [(+1500の商品在庫)(+1000v(貨幣))][+100 I のための追加可変資本のための貨幣]=7000の商品

II) $1500c+299v+201$ 商品での2000 {I と II = 商品で9000}

転換が行われたあとでは次のようになる。

c) I) $5000c+400mc(I)+1000+100(m II)v$ (+商品在庫1500)(商品だけを計算すれば, $5500+1500=7000$)

II) $1500c+100mc(II)+299v+19m(II)v+(182m)$ (=2000)

それゆえ, c) はこうなる。

I) $5400c+1100v$

II) $1600c+318v(+82)=2000$ 」⁴¹⁾

はじめの b) 表式で (+1500の商品在庫) とあるのは, 表式 b) の I) での1500の商品在庫は, II) では既に $1500c+299v$ となっているのであるから, I) の労働者と資本家のための消費手段での商品在庫であろう。I) は可変資本として1000の貨幣と剰余価値の半分 $500m$ を蓄積し, $400c+100v$ に分割されるのであるから, $100v$ のための100の追加可変資本を貨幣で持っているとしてされているのであろう。したがって, I) の拡大再生産の機能配置は完了しているのである。

表式 c) は転換が行われた後の表式である。つまり, I) は $500m$ を $400c+100v$ に分割し $400m$ は c I に直接に合体し, 100 は II) の追加不変資本に転化される。II) は100の追加不変資本を買うがそれは II) の剰余価値の貨幣化による蓄積基金から支出される。そこで, II) では不変資本は $1600c$ となり, 可変資本は $299+19=318$ とされているが, 100 の追加不変資本のための追加可変資本はこれまでの資本構成からすれば20とならなければならないであろう。しかし, II) での蓄積基金の形成はここでは問題とされていない。

しかし, 表式 c) では, I) の可変資本は $1000+100(m II)v$ とされているが, 表式 b) で $(1000v(貨幣)+100 I$ のための追加可変資本のための貨幣) とされていたものである。つまり, 可変資本は追加可変資本をも含めて貨幣形態で前貸しされるとされていたのである。しかし, II) では追加可変資本の貨幣準備は問題とされていない。

それとともに, ここでは蓄積される $500m$ I のうち100が追加可変資本に転化されるとされているのであるから, 追加不変資本として I c に合体されるのは $400m$ ということになる。この蓄積部分の二部門間転換は, II) にとっては $(70m+100m)$ I 対 $(70m+100m)$ II であり, 100 の追加不変資本のための追加可変資本は19とされているのであるから, II) の資本家の個人的消費は, 82とならなければならない。それゆえ, 最後の表式で訂正されているのである。

この表式では, I) の蓄積される500のうち400が c I に直接に合体されるとされているが, 出発点では $c:v$ は $5:1$ であったのが, ここでは $4:1$ とされている。

41) MEGA. II. 11. S. 821

それゆえ、マルクスは、「資本は最初Ⅰ）＝ $5000c+1000v=6000$ であったが、いまでは $5400c+1100v=6500$ であり、500だけ増加している。すなわち $1/5$ だけ増加している。/ 最初資本Ⅱ）は $1430c+285v=1715$ であったが、いまでは $1600c+318v=1918$ であり、203だけ、すなわち $1/8$ 以上増加している。」⁴²⁾と述べているが、これは単純な計算間違いである。Ⅰ）の資本は約8.3%の増加、Ⅱ）の資本は約11.8%の増加である。

Ⅱについては、既にみたように、この MEGA. II. 11 の最終ページ828ページに付録として、追加不変資本100に対する可変資本を18として、したがって、 $1600c+317v+83m=2000$ という計算が記載されている。つまり、マルクスは、転換が行われた後での表式を訂正しているのであり、「それゆえ、c) はこうなる」とした次年度の表式で訂正しているのである。

ここでは部門ⅡはⅠ（ $1000v+500m$ ）対Ⅱ（ $1430c+70m$ ）の転換ばかりでなく、100の追加生産手段を買い入れなければならず、したがって、そのための追加可変資本が必要になるという新しい事態が発生しているのである。しかし、表式c) ではⅠは追加可変資本を貨幣形態で持っているとされているのであるが、Ⅱではそのような貨幣準備は行われていないし、100の追加不変資本を買うための貨幣準備も存在しない。

マルクスは、同じ規模での再生産が行なわれるとすれば、その結果は次のようになるとして、次の表式を掲げている。

$$\left. \begin{array}{l} \text{Ⅰ) } 5400c+1100v+1100m=7600 \\ \text{Ⅱ) } 1600c+318v+318m= \end{array} \right\}^{43)} \text{ 合計}=9836$$

この表式において、 $1100v+550v$ が $1600c$ Ⅱ + $50m$ と転換されれば、次のようになるとして、次の表式を掲げている。

$$\left. \begin{array}{l} \text{Ⅰ) } 5400c+550m \text{ } \{+1650 \text{ (Ⅱ) 消費ファンド} \} \\ \text{Ⅱ) } 1650c+318v+268m \text{ (すなわち } 318-50) \end{array} \right\}^{44)}$$

この表式について、マルクスは、「 $400m$ Ⅰ（ c Ⅰに合体される）には60の可変資本が必要であるとしよう。それが $268m$ （Ⅱ）から差し引かれる。 $268m$ （Ⅱ） $-60=208$ 。」⁴⁵⁾と述べている。これまでの前提では、蓄積される剰余価値の半分550は $440c+110v$ に転換されるはずである。マルクスの説明では $400c+60v$ に転換されるとしているが、それでは蓄積額は460にしかない。また、資本構成は、ここでは $v:c$ は $3:20$ となる。したがって、Ⅰでは有機的構成が原資本の構成よりもより高い構成で拡大再生産が進められるとしているのである。もっとも、それではⅠは追加可変資本を貨幣で前貸するとするならば、Ⅰには150の生産手段が残っている。つまりマルクスは、ここではこれまでの前提とは異なった新しい表式を作成しているのである。

そこで、マルクスは、「 c （Ⅱ）に付加される $100m$ （Ⅰ）は $20v$ を必要とするとしよう。

42) MEGA, II. 11, S. 821

43) MEGA. II. 11. S. 821

44) MEGA. II. S. 821

45) MEGA. II. S. 821

それが260m (I) から差し引かれて240m (I) が残る。そのほかに、c II に合体される50m (I) のために10v が必要であるとしよう。これがm (II) から差し引かれて250になる。⁴⁶⁾ としている。つまり、I になお残っている150m I のうち100の追加不変資本がc (II) に合体され、そのために20v の追加可変資本が必要であるとされているのである。さらに(1100v+550m) I と転換される50の追加不変資本のために10の追加可変資本が必要であるとされているのである。もっとも、m II から差し引かれるのは100c+50c+20v+10v=180である。

また、先の説明では、I の追加可変資本は60v であったのであるが、ここではc (II) に追加されるのは100m I で、それには20v が必要とされるとしている。ここでの有機的構成は原資本とはほぼひとしい1:5である。さらに50の追加生産手段のほかに、そのために必要な追加可変資本10v が必要とされるのであるから、II の剰余価値318m から差し引かれるのは、II の蓄積額150c+30v=180であり、II の資本家の個人的消費額は138m とならなければならない。

こうした計算の上で、マルクスの次年度の拡大再生産のための諸要素の機能配置は、

$$\left. \begin{array}{l} \text{I) } 5800c + 1160v (+1500 \text{ の消費ファンド}) \\ \text{II) } 1800c + 348v (+250) \end{array} \right\} = 10,800$$

$$\left. \begin{array}{l} \text{資本} = \text{I } 7960c + v \\ \text{同上} = \text{II } 2148c + v \end{array} \right\} \text{ 合計} = 10,108$$

この表式で、I の消費ファンド1500は1650の誤りであろう。この表式では、I の蓄積額は400c+60v=460であるが、II の蓄積額は150c+30v=180であるから、II の配置は1750c+348v+128m とならなければならないであろう。また、マルクスの表式でもI の資本は5800c+1160v=6960とならなければならない。また、資本額合計は9058とならなければならない。ここでも、マルクスは、計算間違いを犯しているのである。

したがって、次年度の拡大再生産の結果は、次のようになるとして、マルクスは

$$\left. \begin{array}{l} \text{I) } 5800c + 1160v + 1160m \\ \text{II) } 1800c + 348v + 348m \end{array} \right]^{48)}$$

という表式を掲げている。

この表式について、マルクスは、「この場合には、I が1/2 だけの剰余価値だけ蓄積するのだとすると、c II と交換されるのは1740(v+m) I (=1160+580) だけである。したがってc (II) には60の余剰が残る。これはI から買われなければならない。そのさい、前よりも大きい可変資本が必要でないのであって、われわれは次のものを受け取ることになる。

$$\left. \begin{array}{l} \text{I) } 5800c + 500m \\ \text{II) } 1800c + 348v + 348m \end{array} \right]^{49)}$$

46) MEGA. II. 11, S. 821

47) MEGA. II. 11, S. 822

48) MEGA. II. 11, S. 822

つまり、Ⅱの不変資本が現物で補填されなければならないとすれば、 $1800c$ ⅡはⅠの $1160v+580m+60m$ と転換され、したがって、資本家Ⅰの消費拡大によって $1800c$ Ⅱの不変資本は現物で補填されるのであり、Ⅰの剰余生産物の残りは $580-60=520m$ となる。しかし、マルクスはⅠの蓄積額を $500m$ としている。

マルクスは、「Ⅰは c (Ⅰ)に合体される $400m$ (Ⅰ)のために $60v$ を必要とする。 $(348m$ (Ⅱ)から差し引かれて)、 $288m$ (Ⅱ)が残る。そこで、Ⅰは次のようになる。

Ⅰ) $6200c+1220v$

Ⅱは追加の $100v$ 〔 c の誤植〕のために $20v$ を必要とするそれが $288m$ から差し引かれて $208m$ (Ⅱ)(268 の誤り)が残る、そこで、Ⅱは次のようになる。

Ⅱ) $1900c+368v$ (Ⅱ)〔 $+208$ 〕(268 の誤り)〕⁴⁹⁾

この説明では、Ⅰの蓄積額は $400c+60v=460$ である。したがって、Ⅰには 40 の生産手段が残っている。Ⅱの追加不変資本を 100 としているのは、Ⅰの $60v+40m$ がⅡの追加不変資本になると想定しているからである。そこで、マルクスは、Ⅱは追加生産手段 $100m$ (Ⅰ)をⅠから買うとして、Ⅱの不変資本を $1900c$ とし、この追加生産手段のために $20v$ を必要だとしているのである。したがって、Ⅱの蓄積額は $100c+20v$ であり、これがⅡの剰余価値から支出されるとすれば、Ⅱの資本家の個人的消費は $168m$ Ⅱとなろう。

しかし、Ⅰは 1800 の $(v+m)$ を消費手段に支出し、Ⅰの蓄積額を $500m$ としているのであるから、なお 20 の生産手段が残っている。この $20m$ ⅠをⅡが買うとすれば、さらにこの $20m$ Ⅰの追加生産手段のために 5 の可変資本が必要であり、これが m Ⅱから差し引かれなければならない。そうであれば、Ⅱの資本家の個人的消費は 143 となる。

こうした $(v+1/2m)$ Ⅰのケースが示しているのは、ⅡがⅠよりも急速に生産を拡大しているか、Ⅰの追加蓄積率が低下している場合であろう。

このような場合について、マルクスは、「資本主義的蓄積がおこなわれる場合でも、以前の一連の生産期間に行われたいくつかの蓄積過程の進行の結果として、 c (Ⅱ)が $(v+m)$ (Ⅰ)に等しい場合だけではなく、それよりも大きい場合が徐々におこってくるかもしれない。これはⅡでの過剰生産であって、それはただ大きな崩落によって調整され、結果として資本はⅡからⅠに移ることになるであろう。」⁵⁰⁾と指摘している。

このように、ここではマルクスが重い病状と闘いながら苦闘している状況が如実に表れているのであるが、それはともかく、ここでは $(v+1/2m)$ Ⅰ $<c$ Ⅱの場合を検出したのである。

3) 部門Ⅱの部門間転換による貨幣資本蓄積についての総括

この「第2例」の表式分析において、マルクスが取り組んだのは、部門間転換によるⅡの貨幣資本蓄積である。マルクスは表式の転換分析では計算上の誤りを犯しているが、こ

49) MEGA. II. 11. S. 822

50) MEGA. II. 11. S.

51) MEGA. II. 11. S. 823-824

の分析から、マルクスは、次のような結論を引き出している。

「したがって、次のようなケースがある。

単純再生産の場合： $(v+m)I = cII$ （互いに補填しあう）。

蓄積の場合：ここではなりよりも考察されるのは；その際によりも蓄積率が考察される。これまでのケースではIでの蓄積率は不変で $m/2$ (I) が蓄積される、しかし、 $m \times 3/4$ だけが拡大再生産に、 $m/4$ が貨幣で蓄積されると仮定した。⁵²⁾

しかし、初年度の資本構成は $c:v$ は $5:1$ で蓄積において $4:1$ とされてきたのである。続けて、蓄積の場合には三つのケースがあるとして、次のようにのべている。

「1) $(v+1/2m)(I) = c(II)$, $c(II)$ は $(v+m)I$ よりも小さい。(このことは常にそうでなければならない、そうでなければIは蓄積しないことになる。)

2) $(v+1/2m) > cII$ 。このケースでは、補填は、IIが $(v+1/2m)I$ を $(c+m)$ の一部分によって補填することによって行われ、したがって、この額は $(v+1/2m)$ に等しい。このケースでは、IIにとってのこの転換はその不変資本の単純再生産ではなく、すでにIIの剰余生産物のうちIIが生産手段Iと交換する部分だけのIIの蓄積であって、同時にIIがそれに応じて自分の可変資本を自分自身の剰余生産物から補充することを含んでいる。

3) $(v+1/2m) < cII$ 。このケースでは、IIはこの転換によっては自分の不変資本を明らかに再生産してはいないのであって、したがって不足分はIから買わなければならない。これは、しかし、IIの側からの可変資本のそれ以上の蓄積を必要としない。というのは、IIの不変資本はその大きさからみれば、この操作によって今初めてまさに再生産されるのだからである。⁵³⁾

この最後のケースについて、マルクスの表式を利用した拡大再生産の考察の次の場合を指している。

I) $5800c + 1160v + 1160m$

II) $1800c + 348v + 348m$

この場合には、Iが $1/2$ の剰余価値だけを蓄積するのだとすると、 cII と交換されるのは $1740(v+m)I (=1160+580)$ だけである。したがって、 $c(II)$ には60の余剰が残る。これはIから買わなければならないが、そのさいには前よりの大きな可変資本が必要ではない、というのを指している。そして、Iでは mI の60が追加貨幣資本として蓄積される。このケースについて、マルクスは、「他方、この転換によって、Iの資本のうちただ追加貨幣資本を積み上げてきただけの部分はすでにこの種の“蓄積”を完了したのであり、(前のページの終わりの) 上述したケースで、もし以前と同じように $1/5$ が貨幣資本に転化され、 $4/5$ が現実に蓄積されるのであれば、580のうち $1/5$ が貨幣蓄積に、116と464が現実に蓄積されるが、すでに $116-50$ が金化されており、それからお金化されなければならないのはそのうちの66が残っている。⁵⁴⁾ と述べている。

52) MEGA. II. 11, S. 822

53) MEGA. II. 11, S. 822-823

54) MEGA. II. 11. S. 823

ここではⅠの蓄積額は $1160m$ Ⅰの半分 $580m$ に訂正され、そのうちの $1/5$, 116 が貨幣資本として蓄積され、 $4/5$ の $464m$ Ⅰが追加不変資本として c Ⅰに合体されることになっている。したがって、 $1800c$ Ⅱが現物で補填されるためには、 $1740(v+1/2m+60m)$ Ⅰが $1800c$ Ⅱと転換されるので、すでに貨幣化されているのは $60m$ Ⅰであって $50m$ Ⅰではなく、したがって残るのは 66 ではなく、 56 とならなければならないのである。

しかし、このようにⅠ m の一部分が貨幣化されて蓄積されるのであれば、 $(v+1/2m)$ Ⅰ $>c$ Ⅱの場合にも m Ⅱの一部分が貨幣されて蓄積されとしなければならないのではないだろうか。

さらに、マルクスは蓄積に際しての両部門間関係を一般化して、次のように述べている。

「Ⅰ (m/x) を m (Ⅰ)のうちⅠが収入として支出する部分だとすれば、 $(v+m/x)$ Ⅰは c (Ⅱ)に等しいことも、それよりも大きいことも、小さいこともありうる。しかし、 $(v+m/x)$ Ⅰは常に $(c+m)$ Ⅱよりも小さくなければならない。しかも、Ⅱ (m) のうちどんな場合にも資本家階級Ⅱが自分で食わなければならない部分だけより小さくなければならない。」⁵⁵⁾

資本家階級Ⅱの消費を mk とするならば、 $(v+m/x)$ Ⅰは $(c+mk)$ Ⅱに等しいことも、より大きいことも、より小さいこともありうる、としなければならないだろう。

4) 部門Ⅱの貨幣資本蓄積についての結論

以上のような蓄積が行われる場合の部門間転換の分析をもとに、マルクスは部門Ⅱの貨幣資本蓄積の最終的結論を次のようにのべている。

「Ⅱにとっての本源的な貨幣源泉は、 c Ⅱの一部分と交換される、金生産Ⅰの $(v+m)$ Ⅰである。ただし、金生産者が剰余価値を生産手段に転化させるかぎりでは、この $(v+m)$ ⅠはⅡにはいらない。他方、このような貨幣蓄積（金生産者の側での）が最終的には拡大された規模での再生産にいたるかぎりでは、金生産の剰余価値のうち収入として支出されない部分は追加可変資本としてⅡに入って、ここで新たな貨幣蓄蔵を促すか、あるいはまたⅠから買うための新たな手段を直接に——直接にふたたびⅠに売ることなしに——与えるのである。金生産者が c Ⅱと交換する $(v+m)$ Ⅰからは、Ⅱのある種の生産部門が原料等々として、要するに不変資本の諸要素として——あるいはむしろこれらの要素の再補填として必要とする金部分がさしひかれる。」⁵⁶⁾と第1に金生産をあげている。

マルクスは、単純再生産を論じたさいにも、金生産部門は第Ⅰ部門に属するとしていたのであるが、貨幣材料としての金生産は第Ⅰ部門にも第Ⅱ部門にも属さない第3の部門とすべきであろうが、第Ⅱ部門の原材料等としての金生産は第Ⅰ部門に属する、と考えるべきであろう。

第2は、部門間転換における貨幣資本蓄蔵である。

55) MEGA, II. 11, S. 824

56) MEGA, II. 11, S. 824-825

「ⅠとⅡとの関係のなかでの一時的な——拡大再生産に先行する——貨幣蓄蔵のための要素は、次のような場合にのみ生じる。Ⅰにとっては、 m Ⅰの一部がⅡの追加不変資本のためにⅡに一方的に売られる場合にのみ生じる。同じくⅡにとっては、同じことがⅠの側で追加可変資本について行われる場合に生じる。同じくⅡにとっては、Ⅰによって収入として支出される剰余価値の一部が c Ⅱによって補填されず、したがって m Ⅱ部分にまでおよび、この部分がそれによって直ちに貨幣化される場合に生じる。もし $(v+m/x)$ Ⅰが c Ⅱよりも大きければ、 c Ⅱはその単純再生産のためには、 m ⅡのうちからⅠが消費してしまったものをⅠからの商品によって補填する必要はない。」⁵⁷⁾

Ⅰにとっては、 $(v+m/x)$ Ⅰ $<c$ Ⅱの場合には、 $(v+m/x)$ Ⅰによっては c Ⅱは完全に補填されず、したがってⅡが c Ⅱの補填のために m Ⅰの一部を一方的に買うことによって、Ⅰの貨幣蓄蔵がおこなわれるが、これは追加不変資本ではない。ⅡがⅠから追加不変資本を買うのは、Ⅱが拡大再生産を行う場合である。

Ⅱにとっては、 $(v+m/x)$ Ⅰ $>c$ Ⅱの場合に、Ⅱの剰余価値の一部が貨幣化され、蓄蔵される場合である。このように、マルクスは部門間転換によるⅡでの貨幣資本蓄積を論じているのである。

第3はⅡ内部での貨幣資本蓄積である。

「問題になるのは、Ⅱの資本家たちの交換—— m Ⅱに関連しうるだけの交換——の内部でどの程度まで貨幣蓄蔵が行われるのか、ということである。すでに述べたように、Ⅱの内部で直接的蓄積が行われるのは、 m Ⅱの一部が直接に可変資本に転化される（Ⅰで m Ⅰの一部が直接に不変資本に転化されるのとまったく同様に）ということによってである。Ⅱのさまざまな事業部分のなかでも、また同一の事業部門のさまざまな構成員（消費する構成員）についても、蓄積の年齢階級はさまざまであるが、必要な変更を加えれば、Ⅰの場合とまったく同様に説明される。一方のものはまだ退蔵の段階にあって、買うことなしに売り、他方のものは拡大再生産の時点（沸騰点）に達している（売ることなしに買う）。追加可変貨幣資本はまず始めに追加労働者に支払われる。しかし、この労働力は、貨幣蓄蔵をしつつある人々（労働者の消費にはいる追加の消費手段の所有者）から生活手段を買う。後者による貨幣蓄蔵の程度に応じて、貨幣はその出発点に帰ってこないで、彼らが貨幣を退蔵するのである。」⁵⁸⁾

この部門Ⅱの内部での貨幣蓄蔵は、これまで論じられなかったのであるが、冒頭に、「問題になるのは (Es fragt sich) と述べているのは、 m Ⅱに関連しうるだけの交換の「内部でどの程度まで貨幣蓄蔵が行はれるのか」という提起されている問題にはこれまでの分析とは異なった点が生じることを予見しているからであろう。Ⅱの内部には資本家と労働者がいるだけだから、追加貨幣資本の積み立ては資本家と労働者の間での転換によるしかないからである。

57) MEGA. II. S. 825

58) MEGA. II. S. 825

マルクスは、続けて「すでに述べたように、Ⅱ内部で直接的蓄積が行われるのは、 $m(Ⅱ)$ の一部分が直接に可変資本に転化されるということによってである」と述べている。これはどういうことであろうか。可変資本は常に貨幣形態で投下されるのであるから、 $m(Ⅱ)$ の一部分が直接に可変資本に転化されるわけではないからである。Ⅱで拡大再生産がおこなわれる場合には、Ⅱの拡大再生産を行う資本家はそれまで積み立てられた蓄積基金の一部分を追加貨幣資本として投下する。しかし、追加労働者に労賃が支払われるのは、追加労働者が現実の生産過程で労働によって可変資本価値＋剰余価値を生産した後である。したがって、可変資本として投下された貨幣は労働者の手を通して資本家のもとに還流し、可変資本が貨幣形態に転化するのである。

ここでのマルクスの見解は、蓄積基金を積み立ててきた資本家はその一部分を追加可変資本として追加労働者に支払う。追加労働者は支払われた労賃でさしあたり蓄積基金の積み立てを行っている資本家の剰余生産物を買ひ、資本家は剰余生産物を実現した貨幣を蓄蔵する、ということであろうか。追加労働者が労賃を前払いされるような場合であろう。

しかし、労賃は労働者が生産過程で可変資本価値＋剰余価値を生産した後に支払われるのであるから、 $mⅡv$ は再生産期間内では実現されず、次期に持ち越されることになる。

しかし、マルクスは、続けて、「Ⅱのさまざまな事業部門のなかでも、また同一のさまざまな構成員についても、蓄積の年齢階層はさまざまであるが、必要な変更を加えれば。Ⅰの場合とまったく同様に説明される。一方のものは買うことなしに売り、他方のものは拡大再生産の時点（沸騰点）に達している（売ることなしに買う）」と述べている。つまり、拡大再生産は一斉に行われるのではなく、それぞれの個別資本家は再生産期間内のさまざまな時点で拡大再生産を行うのである。それと同時に、個人的消費は常に日常的に行われるのであって、そのためには、この場合では個人的消費に入る商品であるが、日々生産され、常に市場に存在している。したがって、「追加可変貨幣資本はまず第1に追加労働力に支払われる。しかし、この労働力は、貨幣蓄蔵をしつつある人々（労働者の消費に入る追加消費手段の所有者）から生活手段を買う。彼らの貨幣蓄蔵の程度に応じて、貨幣は彼らの手から出発点に帰ってこないで、貨幣を退蔵するのである。」とマルクスは述べているのである。このように、Ⅱ内部での資本家と労働者との間での $m(Ⅱ)$ の転換によってⅡ内部で蓄積基金の形成が行われるのである。「必要な変更」とは以上のようなことであろう

さらに、ここで考慮されるのは、部門間展開において既に展開されていることではあるが、Ⅰの消費手段需要 $(v+m/x)Ⅰ$ が $cⅡ$ より大きい場合である。その場合には $mⅡ$ の一部分が貨幣化されて蓄蔵される。この場合に、 $(v+mk)Ⅰ = (cⅡ + m - mk)Ⅱ$ の場合にはⅡの追加貨幣資本に転化されるべき剰余生産物が貨幣化される。こうしたケースはⅠでの蓄積が増大して労働者数が増大し、したがって $vⅠ$ が増大し、資本家Ⅰの個人的消費も拡大する場合である。あるいは $(v+m/x)Ⅰ < (cⅡ + m - mk)Ⅱ$ の場合には、追加可変資本に転化されるべき剰余生産物の一部分はⅡの商品在庫として繰り越されるだろう。

お わ り に

『資本論』第2部第8稿の拡大再生産論の原草稿は以上のようなものであるが、エンゲルスは正確にマルクスの草稿に従って編集せず、したがってマルクス草稿の内容は歪められている。従来、マルクス再生産論の研究は歪められたエンゲルス編集の現行『資本論』によって行われてきたのであった。したがって、マルクスの拡大再生産論は、拡大再生産過程の均衡的發展経路を表式によって示すものだという見解が流布されてきたのである。しかし、蓄積率が一定で資本の有機的構成も一定であるといった均衡的發展が現実の拡大再生産過程を表現することは不可能である。マルクスが取り組んだのは、一貫して当初に指摘された拡大再生産の諸条件を明らかにすることであった。つまり、拡大再生産が可能となるための余剰生産手段の存在と、それが満たされているならば、現実の拡大再生産を実現するための一方での蓄積基金の形成と他方での蓄積基金の投下である。それを明らかにするために、とりわけ蓄積の部門間関係を明らかにするために表式が利用されたのである。その際最もマルクを悩ましたのは部門Ⅱにおける蓄積基金の形成の問題であった。マルクスは、この問題を以上のように解決しているのである。